

# 大國文學會誌

第十四號

昭和三十三年三月發行

西府梅花宴……………春日政治一

明治の戦争歌……………小島吉雄六

「移ろひたる菊」備忘……………笹月清美七

會報 會員名簿

大國文學會

# 西府梅花宴

春 日 政 治

新たに筆を執らうと思つたが、この程の匆忙ではとても何時と期し難いから、卓上にあつたラヂオ放送のノートを寫して出すことにする。自然俗談に墮したものであるが、切にお許しを乞ふ。

萬葉集卷五には、梅花の歌三十二首といふものがあるが、之はそれに附いてゐる序文によつて、天平二年正月十三日に、當時の太宰帥即ち太宰府の長官であつた大伴旅人によつて、彼の邸に開かれた梅花の宴に於て詠まれたものであることが知られ、其の歌は主賓合せて三十二人によつて各々一首づつ詠まれたものである。

天平二年は今から千二百〇八年前であつて、正月十三日は無論舊曆であるから、今の新曆に換算すると、恰も二月八日に當るので、丁度今日から三日前の事、時節は殆ど只今頃と見て差支ないと思ふ。さて其の序文は、其の日の模様を漢文で認めてあり、讀まれた歌は一人一首づつで都合三十二首、一々其の作者の名が記されてゐるが、主人たる旅人をはじめ次官以下府の官人及び各國衙の地方官吏である。地方官吏としては筑前守山上憶良・筑後守葛井大城・豊後守大伴三依などを初として、北は對馬・豊岐の守・目、南は薩摩・大隅の目等までを集へたのであつて、誠に廣く九國二島の總動員をした觀がある。相當大きな宴會かつ歌會であつたと想像される。これらの人々の内には、旅人・憶良は勿論のこと、小野老・葛井大成・大伴三依・沙彌滿誓・大伴百代などいふ名の知られた歌人もあるが、亦歌には全然素人といふべき人も半

分以上のものを見るべきであらう。總じて歌は皆梅を詠んでゐるが（梅といふ語はありながら傍題となつたものが一首ある）、歌そのものは概ね感激の薄い實感に乏しいものであつて、むしろ御座なりのもののみと言つてもよいやうに思ふ。

さて其の日は序によると、

時に初春令月、氣淑く風和らぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫す。

とあり、又

庭には新蝶舞ひ、空には故雁歸る。

とあつて、景色は大分春らしく描かれてゐるし、歌には

梅の花今さかりなり思ふども挿頭にしてな今さかりなり。筑後守葛井大夫

ともあり、

我が苑に梅の花散る久方の天より雪の流れ來るかも。主人

ともあつて、梅の花が眞盛りであり、又それが雪のやうに散つたらしいのである。

しかし自分はこの事については早くから疑をもつてゐるのであつて、この序文に掛値のあるは勿論のこと、これらの歌が果して實境を敘したり實感を述べたりしたものであらうかといふことである。三十二首を續けて讀んで見る時、各自が銘々勝手な方向にむいて呟いてゐて、同じ梅樹を中心に見て、それに統合されてゐる歌といふ感じが如何しても起らないのである。

私かに今日の氣候から考へて見ると、二月八日の太宰府は、野にはまだ麥や茶の葉がほのかに青み出した位であつて、彼等が歌つてゐるほどに、柳も芽ぐまず鶯も鳴かず、春はまだく／＼淺かつたらうと思ふ。大伴百代の歌には、

梅の花ちらくはいづくしかすがにこの城の山に雪は降りつゝ。大監大伴氏百代

とあるが、この歌は前掲の主人旅人の歌「我が苑に梅の花散る」の次に序でてゐるのであつて、一讀或皮肉を感じるものである。彼等が會場から南方に眺めた城の山（今の基山）には雪が降りつゝあつたといふのが、或は實況ではなかつたであらうか。勿論梅の花の開落といふことには年によつて遲速はあるが、今日の加減から觀ると、こゝ數日の太宰府は、極めて早咲の梅が一輪二輪といふ程度が常であつて、多くは未だ蕾が固いだらうと感ずる。

契沖はこの序を以て王羲之の書いた蘭亭記に摸倣したものだと言つてゐるが、従つて旅人のこの會が、かの支那の詩の會に倣つたことは明かである。主人旅人は太宰帥となつてこゝ九州に下つたのは神龜二三年頃かと思はれるから、已にこゝに住むこと五六年になる。元來旅人は萬葉歌人の中で、憶良と共に漢文學に通じた人であり、隨つて著しく外來思想の影響を受けた人であるので、支那の詩會をまねて、歌會を催す如きは最も自然な事である。彼は老年にこの遠い邊陲に下つてゐたことを、常に寂しんだのみならず、殊に在任中この地に愛妻を亡くし、自身も重い疾に罹つたことがあつて、常に亡妻を懷ひ、かつは奈良の都を戀ひつゝあつたのであるが、しかし生來極めて明朗な心の持主であり、殊に風流才子であつたので、生活は相當派出であり、むしろ享樂的であつたし、殊に彼が酒を嗜んだことは、彼に讚酒歌十三首があるのでも知れるのであつて、常にこの旅の心を遣る爲に、極めて陽氣な飲讌を事にしてゐたやうである。されば恐らくこれも言はば酒宴の方が主であつて、歌を作ることはむしろ副であつたかも知れない。この序にも

こゝに天を蓋にし、地を座にし、膝を促し傷を飛ばす。

とあつて、宴席を庭に設けて盛に飲んだとあるし、歌にも

青やなぎ梅との花を折りかさし飲みての後は散りぬともよし。笠沙彌

年のはに春の來らば斯くしこそ梅をかざして樂しく飲まめ。野氏宿奈麻呂

などいひ、又

春やなぎかづらに折りし梅の花誰か浮べし酒杯の上に。村氏彼方  
などいふ風流なものも見える。

尙前に、この會合には九州の地方官を總動員したやうだと申したが、勿論この會をする爲に、わざわざ招集したものでなく、府の役人は措いて、恐らく其の他の地方官吏は年頭參賀の爲に府に來合せてゐたので、それを機會にこの會合を開いたものであり、従つて強ち梅の花の開くと開かないとに關しなかつたと思ふ。従つて歌を作ることも梅を題として讀むといふに止まつて、必ずしも實境・實感を問はないことになる。この時の歌のかくなつたのを世では素人が多かつたらといふ點に歸するやうであるが、勿論それもあつたらうけれども、題詠の作であるといふ點が更に大いに原因してゐるやうに思ふ。憶良の如きでさへ

春されば先づ咲く宿の梅の花ひとり見つつや春日くらすむ。筑前守山上大夫

と言つたに過ぎない。甚だ窮した御挨拶のやうにも聞えるのである。

以上歌のことを彼是申したが、それはそれとして、宴會を催して皆が歌を作つたといふこの梅花の宴は、之を文學史上から觀る時は、大きな意義をもつものであつて、抑々支那に於ける詞人・文人の詩會に摸倣した歌會が、日本に起つたものであり、而も歌といふものが風雅人交際の用具になつて行つたことである。萬葉集にはかゝる風流な會合が二三ならず見えるが、其の内でもこの梅花の宴は、年代上最も早いものであり、而も人數の上から最も大きなものである。(天平十年十月橋奈良麻呂集宴十一首、天平十八年正月太上天皇肆宴賦雪十八首内五首を記し、他十三首は作者名の、天平寶字二年二月中臣清麻呂之宅宴歌十首などは年代が後れてゐるし、歌が少い。)漢文學に通じた旅人、而して憶良等によつてかゝる學の催されたことも、亦さもあるべきことであると共に、風流でかつ陽氣な主人旅人が太宰府の長官として九國二島から

の人々を會しての催しに一種の豪華さを覺えるのである。

しかのみならず、それが我が太宰府に開かれたことが當時の歌壇の情勢から、亦深い意義をもつものであると考へる。元來萬葉時代に於ける神龜より天平初年へかけての歌壇には、都には自然詩人の山部赤人、宮廷詩人の笠金村、傳説詩人の高橋虫麻呂等がゐたが、其の時恰も我が九州では太宰帥大伴旅人と筑前守山上憶良とを同時に迎へ、太宰府及び各國衝中にも多くの歌人を集へて、この大きな二星をめぐつての歌の活動といふものは、都の歌壇をさながらこゝに奪ひ去つたかの感さへある。實にこの二星が時も時こゝに落合つて數年間ゐたことは、我が太宰府に京都にも勝つた文學の花を咲かせた所以である。それ故この梅花の宴は、たとひ歌其のものはさして見るべきものでないにしても、全九州二島の人々を一場に集へての盛觀は、恐らく京都にも見なかつた所であつて、こゝ筑紫歌壇の存在を天下に誇示した最も豪華な一事件であつた。勿論旅人自身がそれまで意識してゐたか否かは疑問であるが、今日の我等から見れば、この會合はたしかに彼旅人が筑紫歌壇の爲に氣を吐いた一つの現れとも見え、少くも萬葉集に於ける筑紫歌壇といふ大きな存在の、一つの象徴として見えるものである。

をばり。

(昭和十三年二月十一日放送)

## 明治の戦争歌

小 島 吉 雄

過日、福岡日日新聞の依頼で「戦争と和歌」と題する一文をものしたが、紙數に制限せられて、文中、明治以後の戦争歌を説くこと極めて簡略であつた。乃ち、その文の補遺として茲に更に明治時代の戦争歌で眼に觸れたものを少しばかり録しておかうと思ふ。

明治時代には數度の戦役があつた。そのたびに尠ながら戦争歌が生れた。征清歌集とか征露歌集とかいふやうな戦争歌のみの撰集も幾種類も出てゐるほどである。個人の歌集でも山縣有朋の椿山集や森鷗外の歌日記等は戦争歌が多いといふ點で戦争歌集だと言へるかも知れぬ。

明治時代の最初の戦争は、維新の役であるが、此れに續いては西南戦争などであらう。その頃の歌はまだ舊派全盛時代であるが、當時の歌集にはそれ等を對象にした歌が出てゐて、その數も相當に多い。尤も餘り感心すべき歌は尠いのであるが、その中であつて、山縣有朋の

こえなやむ箱根のみさか雨はれて關のあなたも月になりゆく

黒けぶりたてて戦ふつつの音のひびきにもまたちるもみぢかな

などといふ歌どもは出色の部類に屬するものであらう。前者は明治元年東征の時の作、後者は慶應二年幕兵と櫛の林に戦

つた時の歌である。有朋は武人であつただけに戦争を詠じた歌が非常に多い。而も何れも單なる机上の作でないだけに、實感味のある、舊派歌人としては珍らしくよい出来栄えのものが多し。明治十年の西南戦争の時には、

木留山しらむ砦のすてかがりけぶると見しはさくらなりけり

ともすれば仇まもる身のおこたりをいさめがほにも鳴く郭公

等の佳作があり、日清戦争の時には、

ありなれの川はしわたるものふのかけにともなふ弓張の月

すめらぎの千代よろづよとよばふなる露の中ゆく日の大御旗

後の歌は、二十八年凱旋の供奉をして詠んだものであるが、實に立派な歌である。日露の役には、

いかにして君に頼むかかると時いたづきながら老にける身は

かういふ歌を讀むと、生前とかくの批評を受けた含雪公も實は至誠至忠の人であつたことが分るのである。參謀總長に任ぜられて大本營にあるや、

つつも手にこぼりやすらむ北支那のあら野の霰玉とちる夜は

と詠じ、滿洲軍の戦線を巡視しては、

大づつの音はるかにも閑ゆなり手綱とる手のひだりななめに

奉天の北陵にもおしては、

みささぎのかたへにのこる高殿の朽ちしいらかに草の花さく

などと詠んでをり、明治三十九年平和克復後新宿御苑の御賀宴に、天杯を賜はつて

海山にたたかひかちし面かけもいたたく酒にうかぶ今日かな



と感激してゐる。戦争歌人としての有朋の面目は大略これらの歌で推察せられるであらう。

日清戦争の時のことである。軍樂隊が廣島の大本營に於て御前演奏をした時、外國の軍歌を奏しあげたところ、日本の軍歌をやれとの御下命があつた。然し、その時は寂閉に達し上げる程の適當な軍歌が未だなかつた。止むを得ず樂手の一入たる菊間義清が豫て試作しておいた「喇叭の響」といふのを俄に作曲して演奏申上げた。ところが、一兩日後、大元帥陛下には御製の軍歌を下し給はつたといふ挿話がある。菊間義清といふのは、後に御歌所寄人になつた加藤義清であるが、此の戦争のはじめ頃はかういふ風に軍歌らしい軍歌もない有様だつたらしいのである。だが、戦争始まつて間もなく、新聞や雑誌などに盛んに新作軍歌が載せられた。のみならず、新作軍歌集のやうなものも出版せられた。軍歌熱に伴なつて戦争歌や戦争俳句も盛んになつた。時代が丁度、國民文學要望の風潮を示してゐた時であつた上に、國民の戦争熱がまた熾盛であつたから、かく戦争詩歌の大洪水を將來したのである。明治二十七年十月佐々木信綱の編纂で博文館から出版せられた征清歌集といふのを繙いてみると、東久世通禧や勝安房のやうな舊風人から、與謝野鐵幹、金子薫園の如き新人に至るまで、凡そ歌よみのあらゆる流派、あらゆる階級を網羅してゐる。また盛んなりと言はねばならぬ。試みに、その中の興味ある歌を二三拾ひ出してみる。先づ落合直文の歌に

耳塚のありてふ事をまつるはぬからのえみしに聞せてしがな

いざからこゝろさらひくらへ日の本のますらたけをがこの聲を

詩人宮崎湖處子の歌も數首あるが、その中で

わかき妻の妻すてつと人はいふ身をすててゆく益荒武夫を（從軍行）

日の丸の旗ひるがへせみくに人阿爾泰山のたかねおろしに（進軍）

正岡子規の歌が一首

横太刀を手にとり見れば水無月の風ひややかに龍たちのぼる

子規は此の戦役には従軍したのであるが、まだ和歌の方へは本腰を入れてゐなかつた時代だから、これといふ歌を残してゐない。今の東北帝大教授村岡典嗣氏の歌が一首

さやかなる今夜の月にむかひつつ思ひいづらむふるさとの空 對月懷遠征)

今の九州帝大醫學部教授石原誠氏の歌が同じく一首

てる月に鑑のそでやぬらすらむ虎とりひしぐますらたげをも (征清の軍士を思ふ)

總じて類想歌が多く、歌調も一般に低調で、全體を通じて佳い出来栄えといふことが出来ぬ。中にあつて、流石に與謝野鐵幹と佐々木信綱との作は頭角をあらはしてゐる。譬へば、鐵幹には、「宣戦令の出でたる日つつしみて詠める」と題して八首ある中に、

ささげよむ小手に涙ぞこぼれける神の御階のこのおほみこと

古にためしもきかぬ御軍をよそに見てあるときならなくに

筆とらばその筆をもて太刀とらば其太刀をもていざ仕へてむ

死も生もさもあらばあれ大君の御言のままにゆくべかりけり

などは、集中同想の歌が一首もなく、何か新鮮なものを感じしめるのである。信綱の歌では、擬作歌によい歌がある。

駒なべて高麗のあら野を朝ゆけばはたてなびかし秋の風よく

むらうちてうながす駒の立がみに朝風さむし野路のしのはら (以上擬従軍行)

ぬばたまの夜はふけぬらし銃とりてすすむとりてに月傾きぬ (擬軍中作)

たちまちの月のはのぼりぬゑたの船沈めはてたる荒なみの上に (擬艦中作)

金子薫園にも亦「擬管中作」がある。

たきすてし簾のけぶりがつ消えて雪よりしろしけさのはつ霜  
矢さけびの聲とききしは夢なれや月よりおろす山おろしの風

しかし、これらの歌は一讀して机上の作なることが感ぜられる。殊に「矢さけびの聲」などといふのは遠い昔の夢の跡であつて、實感が少しも出てゐない。これは實戦に参加せずして机上想像の歌だからである。ただ想像の歌の中では調の美しいそしてレベルに達した歌であるといへる。實戦に参加した將士の歌もすくなくないであらうが、征清歌集に出てゐる將士の歌には秀れたのがない。歌人では、大口鯛二が従軍してをるのであるが、鯛二には、明治二十八年旅順口でよんだ歌に、

かざりなき背海原のなみの音をみなわが船にあつめてぞきく

み國人をりてかざせば唐山の桃もさくらの花と見ゆらむ

といふのがある。勿論、鯛二のこれらの歌は征清歌集に收められてゐるのではない、その家集にあるのである。家集といへば、黒田清綱の家集にかういふのがある。

天皇は神にしませば唐舟も白ゆふかけてまつるひにけり(支那艦隊白旗をたて降伏しけることの聞えける時)

以上挙げた諸作は何れも桂園調を基礎とする歌どもであるが、次には異例として、萬葉調の戦争歌を紹介しよう。すなはち、福本日南の歌である。人の従軍するを送る歌に、

魯を伐たば唐加牟伊孔子が墓祭りて告げよ道のため軍すと

二十八年の歳旦には

酌む御酒の屠蘇の羊の歳並を漢の使が歩きにぞ知る

水雷艇隊が威海衛に敵艦隊を盡滅した時に、

黃の海や威海の浦の宵闇に響も高し雷の船

和尚山砲臺占領を觀て

和尚山麓のつつの音絶えて麓に眠る衛士もありけり

自分の從軍に當つての感懷に、

項毛の白くなるまで死にはせでをかしくもある哉人の軍看る

また正岡子規の從軍を送つて、

春風に繞ときて立出づる君が裝の輕くもある哉

等の作がある。日南の歌は、子規や鐵幹の歌に大きな影響を與へてゐて、殊に鐵幹の初期の歌風の所謂男子の歌には此の日南調が屢指摘出来るのである。明治三十三年北清事變の頃、鐵幹の詠んだ歌に、

たくましき七尺をとこ召に洩れて口惜し往かれず義和團うち

奪ひたる敵砲五十更にすゑて大野まもれば雪高う降る

國々の旗手のなかに日の御旗まじるを見れば雄たけびせらる

などとあるのも、畢竟、日南の歌の亞流である。

さて、日露戦争の頃には歌壇は明瞭に新舊兩派に分れてゐたが、新派のうちにも與謝野鐵幹の明星派と伊藤左千夫等の根岸短歌會とが相對立してゐた他に、金子薫園の白菊會や、佐々木信綱の竹柏會等が介在してゐて極めて複雑な相を示してゐた。ところが、明星派は戦争を文藝に反映せしめることには全然反對の態度を示した。その他の者は明星派ほど明瞭ではなかつたが、大體に於て文藝は必ずしも時局に追隨しなければならぬわけでないといふ考へに一致してゐた。もつとも、

一般社會は此のたびは日清の役よりも一層昂奮してゐたやうだし、ヂャーナリズムは戰爭文藝を鉦や太鼓入りで宣傳し獎勵して廻つたから、戰爭小説や軍歌の類は勿論、戰爭和歌も随分あらはれ、征露歌集といふものも出版せられたけれども、新派歌壇としては日清戰爭の時のやうな戰爭歌熱を有つてゐなかつたと言へる。日清戰爭の時は、新舊あらゆる歌人が關心を戰爭に向けたのであつたが、今度はさうではなかつたのである。舊派歌人は相變らず戰爭歌を盛んに作つたが、感激に乏しい題詠歌で同想同類の作が多い。前掲の山縣有朋の歌の如きは實にそのうちの出色のものである。大口鯛二にも戰爭歌が澤山あるけれども、題詠歌であるために有朋の如き實感の裏打ちがない。従つて歌品は有朋のよりも一段低い。新派の方では、根岸短歌會の「馬酔木」に一番多く戰爭の歌があらはれた。根岸派同人では、蕨眞、安江秋水（今の不空）、香取秀眞、伊藤左千夫、赤木格堂等皆戰爭歌をつくつてゐる。ただ長塚節だけが戰爭歌らしい戰爭歌を殆ど作つてゐない。蕨眞の歌などを見ると、

み民われ國內にのこり仇えみし直にはうたず生けるかひなし

月かくす唐山吹雪打しぬぎ立てる益荒雄まなかひにあり（毛布を軍隊に寄贈すとて）

皇國の武夫ゆゑに天地の神だち泣くも眞心しぬび（第二軍南山激戦の記を讀む）

といふ風に非常に國家主義的の思想を詠じてゐる。左千夫の歌でも、

國こそり心一つと奮ひたつ軍の前に火も水もなし

軍艦は吾が物にあらず命こそ吾ものなれとロシヤたけりを

大詔かしこみもちて老幼家に残せどかへりみなくに

比牟かしの海ゆ星落ち天地に輝く光り放ちけるかも（廣瀬中佐）

とあり、香取秀眞の歌には

もろもろのとつ國をして皇國をあふがしむべき時とはなりぬ（旅順の大捷をきく）

やつこわれくがね白がねたからなみむくろをすてて國に報いむ

などと歌つてゐる。投書家の中にも蕨樞堂や石原阿都志等を筆頭として、かういふ愛國心や敵愾心に燃えた詠作が非常に多い。然るに長塚節には、かういふ種類の歌が非常に尠ない。短歌には殆どないと言つてよろしい。明治三十八年七月の馬酔木に掲載せられた「房州行」の一聯中に、應召した漁夫の若き妻と道連れとなり、その女の身上話に惻隱の情をおぼえて、その女の心になりかはつて作つた歌といふのが三首出てゐる。すなはち、

松魚釣りあるみにやりて嘆かぬをいくさといへば心悲しも

清澄の隠るる沖に嵐吹き歸らぬ人もありとは思へど

我が背子と夜床に泣けば思ふことかたみいひえず胸には滿つれど

といふのであるが、これが戦争に關聯した節の歌であつた。節の心を惹いたものは、私情であり人情であつて、天下國家の問題ではなかつたらしい。他の人々が征露歌に昂奮してゐるときに、節はひとりタンポポを歌ひハハコ草を詠じ蠶豆の花をいとほしんでゐるのであつた。彼が根岸派歌人中最も近代的感觉の歌人であつたことと思ひ合はせて甚だわたくしの興味を惹くのである。

「明星」には戦争の歌が非常に乏しい。これはその主宰者たる與謝野鐵幹が「文藝の士は戦争と關係なし」とする主張のためであつて、先づ御大鐵幹をはじめ幹部級に戦争の歌が一首もない。山川登美子の歌に、

みいくさの艦ふねの帆綱ふしなに鉤綱かぎなに召せや干すぢの魔まも擲なむ髪

といふのがあるが、これを以て直ちに戦争歌といひ得るかどうかは問題である。明治三十七年一般歌壇では戦争歌の最盛時であつたが、その三十七年中の明星で、はつきり戦争を歌つたと思はれるのは、僅か次の六首しかない。

砲つなつ小砲つなつけむりさまよふ野に立ちて君が笑まひのうるはしきかな

森 星 嵐

御軍にたけき名得つときこえなば千とせつつみし戀もゆるさむ

玉野 は な 子

みいくさにこよひ誰が死ぬさびしみと髪ふく風の行方見まもる

ゆ ふ ち どり

ゆふちどりとといふのは誰が匿名か未だあきらめてゐない。玉野はな子といふのは平野萬里氏の妻となつた人で、若くして亡くなつた佳人である。他の三首は、

獸もたしつつ死なまし史ふみも螢火に似たる光と笑みにける兄（戦死しける兄を憶ふ）

瀨 口 晋 川

さかしらの詩人が讚たたへあたらずと海に功績いさをを獸いさをすわが兄

戀に詩にありしその日の笑まひ問ふな劍つるぎの領に幸あれと唯（出征にのぞみて） 竹 村 青 雨

といふのであるが、何れも一般投稿歌中のもので歌の價値は大したものではない。總じて明星派の若人にとつては戦争よりも戀の方が大事なのであつた。川上櫻翠の歌に、

ひんがしの御國けがさぬけがさぬをのこぞとひと世秀でし戀えてしがな

といふのがあるが、よく明星的氣風をあらはしてゐる。明治三十七年九月號の明星に出た與謝野晶子の旅順包圍陣中の弟を憶つて作つた「君死に給ふこと勿れ」といふ長詩の如きも親子夫婦兄弟の情愛のためには、「旅順の城は亡ぶとも亡びずとも何かあらむ」、ただ死なずに生きながらへて呉れといふことを大膽に歌つたものであつて、國家主義者大町桂月から非國民だと言つて攻撃せられたものである。一般に藝術至上主義思想は歌人や詩人をして時世に無關心たらしめ、寧ろ反戰的態度をさへ示させたのであつて、つまり西歐的個人主義的思想が人間性尊重の精神と結びついてかういふ現象となつたのであるが、その張本人ともいふべき與謝野鐵幹は、明治三十三四年頃明星を出した當座はまだ熱烈な國家主義者であつて、國家社會に貢獻しない文學といふものは全く無意義であるといふことを強く主張してゐた。それがその後思想

的に急轉回して、文學は國家社會のためのものではない、ただ美への奉仕あるのみだといふのである。蓋し、この鐵幹の轉向過程を究明することは文學史的見地に於ても文化史的精神的見地に於ても興味あることであり、またなかなか大切な事だらうと思ふのであるが、それは他日の機會に譲るとして、却説、此の日露戰爭にも歌人にして從軍參戰した勇士が定めて多いことであつたらうが、それら從軍勇士の歌で、わたくしの眼に觸れたものの中で、些か心惹かれたのは、「馬酔木」投稿家の、足立清知の歌である。その作の二三を左に、

天雲のいや遠なれや砂の海蒙古沙漠の野に宿りすも

今宵はも敵よせこむとおこそかにまもる夜ふけて雪ふりしきる

蒙古のや昌圖のたむろ日をへつつ豆腐うる豎國おもはしむ

自らと衣ぬふ毎に古里に残せる妻を思ひ嘆くも

大和には春咲く花の蕪菜種唐野に咲くは五月雨の頃

雨霞む柳の森にかけは見えず何の鳥ぞもみのほしと鳴く

露しげき荒野の虫のこゑこゑに冷え行く夜らをかこちあひにけり

月も日も同じ曆の唐曆起きふし見つつ大和し思ほゆ

吾兒をし見まくのころ天に通り今や歸らむ時近づきぬ

人皆に逢はく面なみすべをなみ只有りのまま語るべきかも

三軍の大御諭を思へこそいかなる折も勝たざらぬやも

三軍の益良健男と人皆の稱ふる言葉聞くが嬉しさ

無き友の魂祭る日を雲晴れて酔ひなきしつづ芝居見るかも（軍の招魂祭の日）

群鳥群小鳥とも幾千群さわき廻りて秋暮れんとす



あければ際限がないから此れくらゐで略しておかう。

最後に森鷗外の陣中詩歌集「うた日記」から、少しばかり。

さらばさらば 宇品しま山 なれをまた 相見んときは いつにかあるべき

大君の 任のまにまに くすりばこ もたぬ薬師と なりてわれ行く

ておひたる 人にゆづりて 家はあれど 今宵一夜を 木のもとに寝ん

獨漉の みづは濁れり 濁れれど 洗ひし太刀は 霜と冴え冴ゆ

亡友を おもふ涙の 絶えねばか ひとへ沾衣 あふれどもひぬ

沾ごろも 家にやらばや 道すがら 友をうしなふ 旅のしるしに

つはものの 手に手に折りて 敷懸せる 青葉の上に 月照りわたる

いくさらが 濺ぎし血かと わけいりて 見し草むらの 撫子の花

くさむらに酸齧の珠 照る見れば 満洲の野も やさしきところ

逆へ撃つ みいくさ今し 太子河の 霜のふな橋 どよもしわたる

雪の朝 わがこひしきは 紙さうじ てらす日のいろ 竹起つさやぎ

榆の芽の はる遠からじ さに塗の 喇嘛の伽藍に ぬるき雨ふる

めぐむやと 庭木の小枝 ひき撓め 幾たびか見し あいなだのみに

最後の歌は明治三十八年四月四日奉天での作である。

以上、まことに取りとめもない漫談に終つて恐縮するが、時局がら讀者諸君の興味を惹き、また幾分でも参考とならば筆者の望みは足りる。

(昭和十三年二月二十日)

# 「移ろひたる菊」備忘

笹 月 清 美

○

「移ろひたる菊」を美しいものとして觀賞したことは、古今集の

是貞のみこの家の歌合の歌

色かはる秋の菊をばひと、せにふたゝびにほふ花とこそ見れ (秋下)

仁和寺に菊の花ゆしける時に、歌そへて奉れとおほせければよみて奉りける

秋をおきて時こそありけれ菊の花移ろふからに色のまされば (秋下)

などの歌によつて明らかである。

前の歌について、契沖は古今餘材抄に、

「菊はこと花とかはりてうつろひ後またひとさかりあるものなればふたゝびにほふといへり」 (契沖全集第五、二六四頁)

と記し、眞淵は、古今集打聽に、

「菊は花の盛りを愛し、又うつろひて紅になる時をばめづれば、一年に二度花の咲ると思はるゝと也」 (賀茂眞淵全集卷七、一三

六頁)

と言つてゐる。

後撰集には、戀歌四に、

忘れ侍りにける女に遣はしける

よみ人しらず

菊の花うつる心をおくしもにかへりぬべくもおもほゆるかな

かへし

今はとてうつりはてにし菊の花かへる色をばたれか見るべき

といふ贈答がある。これは、心の變つたことを、菊の花のうつろうたのによそへたものである。「うつりはてにし」は、すつかりもとのやうではなくなつたといふのであるが、と言つて、見るかげもなく枯れ凋んでしまつた菊の花を意味すると考へてはいけないであらう。

殊に、同じ後撰集の戀歌五の、

年をへてかたらふ人のつれなくのみ侍りければ移るひたる菊につけて遣はしける

清 蔭 朝 臣

かくばかり深き色にも移るふをなほ君きくの花といはなむ

といふ歌など、相手の心のつれなく移ろうたのを象徴的に示すために「移うひたる菊」を用いたのではあるが、その花は、決して見すばらしいものではなく、移ろうて却つて美しい色であつたのである。

拾遺集の雜秋の、

ものねたみしける男はなれ侍りて後に菊の移るひて侍りけるをつかはすとて

よみ人しらず

老が世に憂きこと聞かぬ菊だにも移るふ色はありけりと見よ

といふ歌の場合も同様で、菊でさへ移ろふといつて、移ろふといふことを強調してゐるのだが、然し、「移ろひたる菊」を贈つたのは、それはそれとして觀賞に値するからなのである。上の句は、菊の華は命を延ばし、菊のきせ綿は老を拭ひすてるといはれる所から來たのであらう。

○

勅撰集だけを繰つてみても同様な歌は多い。その中には、例へば、後拾遺集の、秋下の、

永承四年内裏歌合に残菊をよめる

中納言資綱

むらさきに移ろひにしを置く霜のなほ白菊と見するなりけり

といふやうなのがある。「移ろひたる菊」は即ち殘菊なのである。

○

伊勢物語には、十八段に、

昔なま心ある女ありけり。男ちかくありけり。女歌よむ人なりければ、こゝろみんとて、菊の花のうつるへるを折て男のもとへやりける

くれなるにほふはいづら白雪の枝もたわゝにふるかとも見ゆ

とあり、又、八十一段に、

むかし左のおほいもうちぎみいませかりけり。加茂河のほとり六條わたりに家をいとおもしろくつくりてすみ給ひけり。神な月のつごもりがたさくのはなうつろひざかりなるに、もみぢのちぐさに見ゆるをり、みこたちおはしませせて云々

とある。前のは、「移ろひたる菊」を、くれなゐにほふと言ひ、後のは、移ろひざかりと言つてゐる。眞淵の伊勢物語古意は、後のについで、

白き菊の此比紅にも紫にもうつろひたる其色のにほひさかりをいへり（賀茂真淵全集卷十）と註してゐる。

○

かけろふの日記によると、道綱母は例の「歎きつゝ」の歌を「移ろひたる菊」につけて兼家に贈つたのであつた。即ち、

二三日ばかり有りて、曉方に門を叩く時あり。然なめりと思ふに憂くて開けさせねば、例の家と思しき所に物したり。つとめて、なほもあらじと思ひて、

歎きつゝ獨ぬる夜の明くる間はいかに久しきものとかは知る

と例より引きつくりひて書きて、移ろひたる菊にさしたり。（日本古典全集本三六一七頁）

とある。道綱母は、兼家の愛の衰へを怨む綿々の情を、この「移ろひたる菊」に托してゐるのである。この菊によつて端的に、「あなたの心は移ろうてゐる」と訴へてゐるのである。かけろふの日記解環は、

「歌を菊につけられしも、時節の物なれども、心あるに似たり。」

と言ひ、かけろふの日記解環旅癡は、それを補つて、

「うつろひたる菊にさしたるは、公の心のうつりたるをたとへて歌の餘情を見せたり。」

と言つてゐる。

歌の餘情を見せたといふ、この「うつろひたる菊」は、事實どんな菊であつたらうか。蜻蛉日記講義（喜多義勇氏著）は、この點に言及して、

「『うつろふ』は色褪せて萎んでゐる意」

と説いてゐる。けれども、今まで見て來た例によつて推測されるやうに、贈答に用ゐられた「移ろひたる菊」は、凋んだ菊ではなくて、やはり觀賞に値するものではなかつたか。それで充分人の心のうつろひを諷刺することは出来るのである。

○

源氏物語の紅葉賀の卷に、

かざしの紅葉いたう散り過ぎて、顔のにほひにけおされたる心地すれば、おまへなる菊を折りて左大将さしかへ給ふ。日暮れかゝるほどに、けしきばかりうちしぐれて、空のけしきさへみしりが怪なるに、さるいみじき姿に、菊の色々うつろひえならぬをかざして、けふはまたなきてをつくしたる、入綾の程そゞろさむく、この世のことも覺えず。(校註日本文學大系 第六卷一八四頁)

とある。「菊の色々うつろひえならぬを」とある所について、岷江入楚は、

「えもいはすおもしろき花也」

と言ひ、萩原廣道の源氏物語評釋は、

「菊は露霜にうつろひたるをしそめづるならひ也故にえならぬといへり」

と言つてゐる。最近の諸註釋は、多くこれに倣つてゐる。

又、宿木卷には、

御前の菊うつろひ果てで盛りなる頃、空の氣色のあはれにうちしぐるゝにも、まづこの御方に渡らせ給ひて、云々(校註日本文學大系 第七卷五四六頁)

といふ所、及び、

菊の、まだよくもうつろひはてで、わざと繕ひたてさせ給へるは、なか／＼遅きに、如何なる一本にかあらむ、いと見所ありてうつろひたるを、とりわきて折らせたまひて、云々（校註日本文學大系 第七卷六〇二—三頁）  
といふ所がある。

前の、「うつろひはてで」については、細流抄に、

「うつろひはてずして也」

とあるが、源註拾遺は、これを難じて、

「今案、ての字清むへし。云々。うつろふ事のさかりなる也。うつろひたるとさかりなるとにはあらず。時分にても知へし。うつろひて後一さかりあるか菊の徳なり。」（契沖全集 第六卷五六〇頁）

と言ひ、これを受けて、玉の小櫛は、

「下の<sup>て</sup>もじ清むべきこと、拾遺に、くはしくいへるがごとし、うつろひはてとは、全くよくうつろひたるをいふ也」

と言つてゐる。日本文學大系本が、「はてで」としてゐるのはよくない。

後の「うつろひはてで」については、玉の小櫛に、

「細流に、菊のさかりなる也とあるは、はてでといふ詞にかなはず、このすべての語にもたがへり」とある。これに従ふべきである。

紫式部日記に、

世におもしろき菊の根を尋ねつゝ、掘りてまゐる。いろ／＼うつろひたるも、黄なるが見どころあるも、さまざまに植ゑたてたるも、朝霧の絶間に見わたしたるは、げに老もしぞきぬべき心地するに、云々（校註日本文學大系 第三卷二八四頁）といふ所がある。この、菊の「いろ／＼うつろひたる」について、紫式部日記精解は、

「うつろふー映合。古き語釋どもには、移ること、變ること、散ることのみ解きたれど、此處は彼れ是れの色どもの、映り合ひて美しき由なり。」（五十頁）

と言つてゐる。けれども、やはり美しい「うつろひたる菊」と解すべきで、紫式部日記講義（三木五百枝著）の、

「種々ある菊の中には、盛り過ぎて色の少し變りたるがために、却りて、見よきものもありとなり」（七十七頁）

と言ふ説の方が當つてゐる。

○

榮華物語の玉の村菊の卷に、

枇杷殿の焼けし折の儘に、命婦の乳母里より菊にさして參らせたる、

いにしへぞいと戀しきよそ／＼にうつろふ色をまきにつけても

とあれば、辨の乳母返し、

菊の花おもひの任かにうつろへばいとむかしの秋ぞこひしき（校註日本文學大系 第十一卷二九九頁）

とある。この場合は、中宮の御遷移と菊のうつろふのとを掛けたのであるが、「うつろひたる菊」につけて、昔の盛りの菊を懐しんだ形になつてゐる。「移ろひたる菊」に獨特の美しさを見るときはいへ、盛りの花に比べれば劣つて見えるの



である。

又、御賀の巻には、

所々の草前裁打霜がれて、いかにぞやあるに、一本菊叢菊などの、あるは盛りにあるは移ろひたる、又花のなき程なればにや、今日はいとこめで勝りぬべし。(校註日本文學大系 第十一卷四三三頁)

とある。これによると「移ろひたる菊」が觀賞されるのは他に花のない時分だからだと云ふことになる。

こまくらべの巻には、「岸の菊久しく匂ふ」といふことを題にして奉つた歌が十六首あるが、「移ろひたる菊」をよんだものはない(校註日本文學大系 第十一卷四六〇—二頁)。

さて、蜘蛛のふるまひの巻に、

色々にうつろひたる菊の中をおしわけて、おき惑はせる白菊の袖の見えたるもをかし。(校註日本文學大系第十一卷六六九—七〇頁)

と見え、又、根合の巻に、

平少納言、菊のうつろひたるに二藍のうはぎ、さうしのかたにてむらごの絲して玉をあげまきに結びて、後撰古今と織れり。(校註日本文學大系 第十一卷七〇一頁)

と見えてゐる。この「移ろひたる菊」は、衣の襲の色目のことである。これによつて「移ろひたる菊」が、美しい色彩として對象的に考へられてゐたことがわかる。榮華物語詳解(和田英松・佐藤球著)は、前の例を説明して、

「うつろひたる菊は霜をへて色のかはれるをいふ。さてうつろひ菊は女官御抄には表中紫に裏背なるをいひ或は薄紫とも蘇芳とも或は裏白とも實とも裝束の書どもに見えたり。白菊は表白に裏蘇芳にて白梅におなじきよし女官御抄西三條裝束抄等に見えたり。さてこゝは皆女房の衣どもをいへるにておきまどはせるとは古今集秋下に、心あてに折らばや折らん初霜のおきまどはせる白菊の花、と

ある歌の詞によれり」(卷十三、六八頁)

と言つてゐる。

○

大鏡の伊尹傳の所に、

助信の少將、宇佐の使にてくだられしに、殿上にて錢に菊の花のうつろひたるを題にて、別れの歌よませ給へる、

さは遠くうつろひぬとかきくの花をりて見るだにあかぬ心を(岩波文庫本 一一〇頁)

とある。

大鏡詳解(落合・小中村著)は

「うつろふは花の色のさむると人の移りゆく義と兩方にかけてたりきくは菊に開をかけをりては菊を折るに助信のそこに居ることをか  
けたり」(風の巻)

と註し、大鏡註釋(鈴木弘恭著)は、卷之五に、

「うつろひぬは移轉するを菊の花の衰ふるにかけていへり」

と註してゐる。佐藤球の大鏡詳解は前の詳解の説と全く同じであり、挿註大鏡通釋(橋純一氏著)にも、

「惜しくも菊花の霜に色かはりうつろふにも譬ふべく云々」

と言つてある。諸註一致して、「うつろふ」は、移行と花の褪色とを掛けたものとしてゐる。勿論、この場合、「菊の花の移ろひたる」は、花の盛りとの對比に於いて歎かれてゐるには違ひないが、それが直ちに枯れ凋みを意味することにはならないであらう。

平家物語の、建禮門院が大原寂光院に入らせ給ふ條に、

岩に苔むして、寂びたる處なりければ、住まほしうぞ思しめす。露結ぶ庭の萩原霜枯れて、籬の菊のかれくくに、移ろふ色を御覽じても、御身の上とや覺しけん。(山田孝雄氏著平家物語五一四頁)

といふ一節がある。女院は、専ら、そこに、移ろひゆくものの姿を御覽になつたのであらうが、この「移ろふ色」にも一種の美しさがあつたに違ひない。

○

一體、菊は、萬葉集には全く見えてゐない。記紀や風土記にも出てゐない。僅かに懷風藻に見える位であるから、奈良朝ではあまり賞翫されなかつたものであらう。伴信友は比古婆衣の菊についての考證の處で、天武天皇の御代には既に渡來してゐたであらうと言つてゐるが、平安朝になると、右に舉げた例でもわかるやうに、菊の觀賞は非常に盛んで、菊合や菊の宴などが行はれるに到つた。

さて、「移ろひたる菊」を觀賞することは、支那で初まつたことである。倭訓栞は、「うつろひさかりなる」の條に、  
「東坡が詩に菊殘猶有<sub>二</sub>微<sub>レ</sub>霜枝<sub>一</sub>と見えたり」

と記してゐる。前に舉げたやうに、後拾遺集では、殘菊といふ題で「移ろひにしを」と詠んでゐるし、後に掲げるやうに、中島廣足は、同じ殘菊といふ題下に、「移ろひたる菊」のことを述べてゐる。即ち、「移ろひたる菊」の趣味は、殘菊から來たのである。

漢籍における殘菊の用例と、これに對する支那人の感情については、こゝに述べるだけの材料をもたない。我が國で

は、殘菊は、例へば、榮華物語の殿上の花見の巻の、

今宵しもくまなくてらす月かけは残りの菊を見よとなるべし（校註日本文學大系第十一卷六一九頁）

といふ左衛門督師房の歌や、風雅集の冬歌にある、

滌紫残れる菊は白露のあきのかたみに置けるなりけり

といふ藤原道信の歌などのやうに用ゐられてゐる。又、宮中では、毎年十月五日に、殘菊の宴といふのが催された。これらの殘菊は果して「移ろひたる菊」を意味するのであらうか。何だか、晩秋から初冬まで元氣に吹き残つてゐる菊のここのやうな氣がする。

○

現代においても「移ろひたる菊」が觀賞されてゐるかどうか、私は寡聞にして知らない。中島廣足は樞園文集の中に「殘菊」と題して、

「今の世に菊うる人はこちたくすぐりなせる盛の花をのみ、もてはやして、すこしいうかはりぬれば、おもひすてゝ見もやらず。

問ひくる人はたなかりけり。やうく霜おきてをりく打しぐるゝに紫だちてにほへるいろはうつろひ、さかりとて、むらくの人のめでつるも、げにことわりに、中々あはれふかう身にしみておぼゆるが、しばしもそむかれぬまがきの花よ、云々」（中島廣足全

集第一編三三三頁）

と言つてゐる。現代の菊觀賞家も、恐らく、廣足にその無風流を難ぜられねばならないのではあるまいか。因みに、右の中島廣足全集の文の中、

「うつろひ、さかりとて、むらくの人の」

とあるのは、

「うつろひざかりとて、むかしの人の」

の誤讀であらう。廣足は、その玉轂窓の小篠の「うつろふ」の條に、

「菊の色は霜にあひて變りたる後もまたをかしきものにてそれをうつろひ盛と云白菊の紫にうつろひたるはことにをかしき也」(前

編 下二丁ウ)

と言つてゐる。

○

何色の菊でも、移ろへば、すべて「移ろひたる菊」の美しさをもつものかどうか詳かにしないが、伴信友は、前掲、比古婆衣、十七の卷の「菊」の條で、

「古歌どもに多く白菊をよみ又うちまかせて白きものとしてよみ、又殘菊のうつろひて色のかはれるを、またさらにめづるよしによめるも白菊をいへるなり、古の菊はなべて白きが多かりしにこそ云々」(伴信友全集、第四、三七九頁)

と言つて、「移ろひたる菊」は、白菊の移ろひたるものとしてゐる。

(昭和十三年二月記)

# 會報

## 例會

昭和十二年十月九日 夜

「文藝活動の機構」

笹月 講師

昭和十二年十二月十三日 晝

「旅行談・その他」

春日 教授

昭和十三年一月十七日 晝

「卒業論文に就いて」

園井 浩雄  
瀬良 益夫  
城島 恒雄

豫饒會 新卒業生送別豫饒會

昭和十三年二月十日 夜

於 博多中對馬小路「ヤマ利」

會誌 第十三號

昭和十二年六月三十日附發行配布す

## 卒業論文題目 昭和十三年一月提出

日本文學の發生と傳承と

園井 浩雄

平家物語の研究

城島 恒雄

―八坂本平家物語の句讀に就いて・他―

古代祝詞の諸相

瀬良 益夫

―その古代日本精神史に於ける地位と意義―

平安朝日記文學の序説

高橋 重二郎

森鷗外研究

野本 清

近松世話淨瑠璃

横山 正

―表現形式を中心として―

## 昭和十二年第二學期講義題目

國語學 概論

春日 教授

平安朝文學史

春日 教授

中世後期文學思想

小島 助教授

枕草子 演習

春日 教授

芭蕉連句 演習

小島 助教授

近松淨瑠璃 演習

小島 助教授

蜻蛉日記 演習

笹月 講師

昭和十三年三月二十五日印刷  
昭和十三年三月三十日發行

編輯兼  
發行者 岩 崎 宗 次 郎  
矢 野 文 博

發行所 九州帝國大學國文學研究室

福岡市極樂寺町六番地

印刷所 九州印刷株式會社

電話西〇〇九八番

福岡市極樂寺町六番地

印刷人 兒 玉 敬 治